

高校・大学年代女子サッカー選手のキャリア形成に関する一考察
Career Developing Process of Female Youth Soccer Players

稲葉 佳奈子（成蹊大学）、飯田 義明（専修大学）、上向 貫志（武蔵大学）

成蹊大学一般研究報告 第50巻第5分冊

平成29年11月

BULLETIN OF SEIKEI UNIVERSITY, Vol. 50 No. 5

November, 2017

高校・大学年代女子サッカー選手のキャリア形成に関する一考察

Career Developing Process of Female Youth Soccer Players

稲葉 佳奈子¹ 飯田 義明² 上向 貫志³

Kanako INABA, Yoshiaki IIDA and Kanshi UEMUKAI

1. はじめに

日本のスポーツ構造の変化は、アスリートのキャリア形成に大きな影響をおよぼしている。特に若年層については、アスリート養成の主流を学校運動部が占めてきた従来の状況から、総合型スポーツクラブや民間クラブなど他の制度や組織が関わるなど、スポーツ環境が変化しつつある。そのことに関して、「民間スポーツクラブがアスリート養成の実践空間に参入することによって、学校運動部と民間スポーツクラブの両者の間には文化的正当性をめぐるせめぎ合いが起きていて、そこにスポーツ界外部からの政治的・経済的な要求や外的諸力が入り込みながら、全体としてはきわめて複雑な構造を呈している」という松尾（2015）の指摘がある。この視点から高校・大学あるいはそれ以降の年代のスポーツキャリア形成を考えると、従来の仕組みとは別の場や機会を併せて前提とすることが求められてくるといえよう。そうした状況に対して、飯田（2012, 2013）は、学校から企業あるいはプロへとという単一のルートを前提とするのではなく、学校運動部とは異なる環境でスポーツキャリアを形成する層に着目し、男子サッカーにおけるユース年代の選手の進路決定プロセスの特徴や、小学生段階からの選抜クラス制度と保護者のキャリア継続支援との関連性を明らかにしてきた。

一方、女子サッカーに目を向けると、チーム数や地域による偏りを背景として、中学以降もサッカーを続けること自体が容易ではないということが、競技の普及における主要な課題とされている。さらに、アスリートとして高いレベルでのキャリアを継続してもその先に「プロ」はなく、「大学進学」という選択肢も男子と比較して十分とはいえない。つまり、不透明かつ選択肢が限られているなかでのキャリア形成とならざるをえないのが、女子サッカーを取り巻く現状であるといえる。そうした女子サッカーの競技構造は、どのような社会的要素に支えられているのだろうか、そして選手のキャリア形成プロセ

1 成蹊大学文学部

2 専修大学経済学部

3 武蔵大学基礎教育センター

スにどのような影響をもたらすのだろうか。

本研究は、上記の問題意識のもと、日本の女子サッカー選手のスポーツキャリア形成を、社会的な視点からとらえる研究の一環として位置づけられる。ただし同様のテーマについて先行する学術研究や調査が多くはみられない現状から、まずは対象を高校・大学年代の選手に絞り、彼女たちのキャリア形成プロセスとキャリア志向の傾向を把握することから始めた。予備的調査として2015年2月と8月に質問紙調査をおこない、続いて2016年3月と8月に、事例をさらに掘り下げ具体化するためのインタビュー調査をおこなった。本稿は、それら一連の調査を整理し、学術的な分析・考察につなげるための論点を提示することを目的とする。

2. 調査の概要と結果

(1) 大学生選手を対象とした質問紙調査

2015年2月、一般社団法人全国大学女子サッカー連盟主催「大学女子サッカー地域対抗戦2015」⁴に向けて、全国から招集された選手で構成される学連選抜2チーム、そして各地域の選抜チームを加えた計12チーム⁵の所属選手を対象に、質問紙調査をおこなった。質問紙は大会開催前に連盟会長による内容確認および承認を経て各チームに配布され、大会期間中に回収された。このうち217部（選抜チーム28、その他チーム189）を分析の対象としている⁶。

以下、回答の集計結果を「Ⅰ. サッカー選手としてのキャリア形成過程について」、「Ⅱ. 重要な他者について」、「Ⅲ. 現在のサッカー環境について」、「Ⅳ. サッカー選手としてのこれからのについて」という4つのカテゴリーに分類して示す。

Ⅰ. サッカー選手としてのキャリア形成過程について

1. サッカーを始めた時期

(1) 小学校低学年	20(71%)	(1) 小学校低学年	130(69%)
(2) 小学校高学年	6(21%)	(2) 小学校高学年	37(29%)
(3) 中学校	1(4%)	(3) 中学校	1(1%)
(4) 高校	0(0%)	(4) 高校	5(3%)
(5) その他	1(4%)	(5) その他	16(8%)

2. 始めたきっかけ

(1) 両親・きょうだい	14(50%)	(1) 両親・きょうだい	117(62%)
--------------	---------	--------------	----------

4 2015年2月23日～26日アスコザパークTANBA（兵庫県丹波市）にて開催された。

5 地域選抜チームは、北海道・東北選抜、東関東選抜、西関東選抜、北信越選抜、東海選抜、関西選抜、四国・中国選抜、九州選抜である。以下、本文および調査結果を示す表における表記は、学連選抜を「選抜チーム」、地域選抜を「その他のチーム」とする。

6 無回答はデータに含まないものとする。

(2) 友人	10(36%)	(2) 友人	40(21%)
(3) 先生・監督	1(4%)	(3) 先生・監督	1(1%)
(4) テレビ	1(4%)	(4) テレビ	2(1%)
(5) 漫画	0(0%)	(5) 漫画	0(0%)
(6) サッカーが盛ん	1(4%)	(6) 地域でサッカーが盛ん	4(2%)
(7) サッカーを観戦	0(0%)	(7) サッカーを観戦	7(4%)
(8) 好きな選手に憧れて	0(0%)	(8) 好きな選手に憧れて	1(1%)
(9) その他	1(4%)	(9) その他	9(5%)
3. 中学校時の所属			
(1) 地域クラブ	14(50%)	(1) 地域クラブ	118(62%)
(2) 民間スクール	1(4%)	(2) 民間スクール	5(3%)
(3) Jリーグ関連組織	2(7%)	(3) Jリーグ関連組織	13(7%)
(4) なでしこリーグ関連組織	2(7%)	(4) なでしこリーグ関連組織	18(10%)
(5) 学校部活動	11(39%)	(5) 学校部活動	84(44%)
(6) その他	4(14%)	(6) その他	4(2%)
4. 高校時の所属			
(1) 地域クラブ	4(14%)	(1) 地域クラブ	19(10%)
(2) 民間スクール	0(0%)	(2) 民間スクール	3(2%)
(3) Jリーグ関連組織	0(0%)	(3) Jリーグ関連組織	3(2%)
(4) なでしこリーグ関連組織	1(4%)	(4) なでしこリーグ関連組織	6(3%)
(5) 学校部活動	19(68%)	(5) 学校部活動	154(81%)
(6) その他	4(14%)	(6) その他	4(2%)
5. 高校を選んだ理由(複数回答)			
(1) 高校から勧誘	4(14%)	(1) 高校から勧誘	64(34%)
(2) サッカー強豪校	11(39%)	(2) サッカー強豪校	57(30%)
(3) よい指導者がいる	6(21%)	(3) よい指導者がいる	23(12%)
(4) 施設・環境	6(21%)	(4) 施設・環境	16(8%)
(5) 家から近い	2(7%)	(5) 家から近い	16(8%)
(5) 進学率	2(7%)	(6) 進学率	32(17%)
(6) 勉強との両立が可能	2(7%)	(7) 勉強との両立が可能	32(17%)
(7) 指導者のすすめ	1(4%)	(8) 指導者のすすめ	12(6%)
(8) 先生のすすめ	0(0%)	(9) 先生のすすめ	1(1%)
(9) サッカーの友人のすすめ	0(0%)	(10) サッカーの友人のすすめ	4(2%)
(10) 両親のすすめ	0(0%)	(11) 両親のすすめ	9(5%)
(11) きょうだいのすすめ	0(0%)	(12) きょうだいのすすめ	0(0%)
(12) その他	7(25%)	(13) その他	17(9%)

設問1の回答によると、「(1) 小学校低学年」が選抜チーム71%、その他チーム69%ともっとも多く、「(2) 高学年」と合わせると80%以上が小学校時にサッカーを始めている。約7割の選手が10年～14年のキャリアをもつことがわかる。また、選抜チームの50%、その他チームの62%が、きっかけとして「(1) 両親・きょうだい」を挙げている。

中学校時には「(1) 地域クラブ」への所属が半数以上（選抜50%・その他62%）を占めるのに対し、高校時になると入れ替わるように「(5) 学校部活動」への所属が主流（選抜68%・その他81%）となるのが特徴的である。「中学校に女子サッカー部が少ない」という日本女子サッカーの現状を反映しているといえよう。

「高校を選んだ理由」として、選抜チームでは39%が「(2) サッカー強豪校」をあげており、次いで「(3) よい指導者」と「(4) 施設・環境」がそれぞれ21%、「(1) 高校からの勧誘」が14%と、総合してサッカーに関わる選択肢の比率が高い。その他チームでは(1)が34%、(2)が30%と、同様にサッカーに関わる理由が多く選ばれている。一方で、(3) 12% (4) 8%については、「(6) 勉強との両立が可能」の17%を下回る結果となっている。

6. 中学時代

(1) サッカー中心	18(64%)	(1) サッカー中心	128(68%)
(2) ややサッカー重視	10(36%)	(2) ややサッカー重視	46(24%)
(3) やや勉強重視	0(0%)	(3) やや勉強重視	7(4%)
(4) 勉強中心	0(0%)	(4) 勉強中心	2(2%)

7. 高校時代

(1) サッカー中心	23(82%)	(1) サッカー中心	145(77%)
(2) ややサッカー重視	5(18%)	(2) ややサッカー重視	26(14%)
(3) やや勉強重視	0(0%)	(3) やや勉強重視	10(5%)
(4) 勉強中心	0(0%)	(4) 勉強中心	5(3%)

8. 中学時代の家族の態度

(1) 非常に奨励	24(86%)	(1) 非常に奨励	141(75%)
(2) 少し奨励	3(11%)	(2) 少し奨励	38(20%)
(3) あまり奨励されなかった	0(0%)	(3) あまり奨励されなかった	2(1%)
(4) 奨励されなかった	0(0%)	(4) 奨励されなかった	2(1%)

9. 高校時代の家族の態度

(1) 非常に奨励	26(93%)	(1) 非常に奨励	147(78%)
(2) 少し奨励	1(4%)	(2) 少し奨励	30(16%)
(3) あまり奨励されなかった	0(0%)	(3) あまり奨励されなかった	2(1%)
(4) 奨励されなかった	0(0%)	(4) 奨励されなかった	4(2%)

10. 高校時代一流選手になりたいと思っていましたか

(1) 強く思っていた	9(32%)	(1) 強く思っていた	56(30%)
(2) やや思っていた	14(50%)	(2) やや思っていた	73(39%)
(3) あまり思わなかった	5(18%)	(3) あまり思わなかった	41(22%)
(4) 思わなかった	0(0%)	(4) 思わなかった	15(8%)

選抜チームでは全員、その他チームでも90%以上が、中学から高校にかけてサッカーに専心してきたことがわかる。また、そうした選手のサッカーへの取り組みを家族が奨励するというありかたも主流であると示された。ただし、サッカーへの専心が、将来の「一流選手」としての自己イメージにストレートにつながるものであるかどうかは、さらなる検討が必要である。設問10では(1)(2)の合計が選抜チーム82%・その他チーム69%と、決して低くはない値を示しているが、「になりたい」という「思い」がどの程度現実的なキャリアプロセスを想定したものであるか、個々の選手によって差が出てくる可能性があるのではないか。

II. 重要な他者について

11. 進路の決定の相談（複数回答）

(1) 両親	25(89%)	(1) 両親	170(90%)
(2) きょうだい	2(7%)	(2) きょうだい	7(4%)
(3) サッカーの友人	5(18%)	(3) サッカーの友人	24(13%)
(4) 学校の友人	0(0%)	(4) 学校の友人	8(4%)
(5) チームの指導者	8(29%)	(5) チームの指導者	43(23%)
(6) 学校の先生	4(14%)	(6) 学校の先生	15(8%)
(7) その他	0(0%)	(7) その他	0(0%)

12. サッカー等の悩みの相談（複数回答）

(1) 両親	8(29%)	(1) 両親	42(22%)
(2) きょうだい	0(0%)	(2) きょうだい	11(6%)
(3) サッカーの友人	24(84%)	(3) サッカーの友人	150(79%)
(4) 学校の友人	2(7%)	(4) 学校の友人	12(6%)
(5) チームの指導者	7(25%)	(5) チームの指導者	38(20%)
(6) 学校の先生	1(4%)	(6) 学校の先生	5(3%)
(7) その他	0(0%)	(7) その他	5(3%)

13. サッカー以外の悩み相談（複数回答）

(1) 両親	10(36%)	(1) 両親	51(27%)
(2) きょうだい	1(4%)	(2) きょうだい	19(10%)
(3) サッカーの友人	19(68%)	(3) サッカーの友人	110(58%)

(4) 学校の友人	10(36%)	(4) 学校の友人	96(51%)
(5) チームの指導者	0(0%)	(5) チームの指導者	2(1%)
(6) 学校の先生	0(0%)	(6) 学校の先生	6(3%)
(7) その他	1(4%)	(7) その他	7(4%)

「進路の決定」については、(1) が選抜89%、その他90%と高く、いずれにおいても両親の影響が主であることがわかる。「(5) チームの指導者」は、この設問への回答では選抜チームで29%、その他チームで23%にとどまるものの、決定以前のプロセスで相談相手となっていた可能性は否定できない。

サッカーの悩みごとの相談相手としては80%前後が「(3)サッカーの友人」を選び、サッカー以外の悩みごとでも選抜チーム68%・その他チーム58%と「(4)学校の友人」を上回る値を示しており、選手にとってサッカーを通じた友人関係が重要であったことがうかがえる。また、サッカーの悩みごとであるにもかかわらず、相談相手としてチームの指導者の割合があまり高くないという点は注目すべきであろう。

Ⅲ. 現在のサッカー環境について

14. 大学を選んだ理由（複数回答）

(1) 大学から勧誘	11(39%)	(1) 大学から勧誘	46(24%)
(2) サッカー強豪校	4(14%)	(2) サッカー強豪校	36(19%)
(3) よい指導者がいる	5(18%)	(3) よい指導者がいる	23(12%)
(4) 施設・環境	6(21%)	(4) 施設・環境	49(26%)
(5) 家から近い	6(21%)	(5) 家から近い	28(15%)
(5) 就職率	6(21%)	(5) 就職率	28(15%)
(6) 勉強との両立が可能	4(14%)	(6) 勉強との両立が可能	40(21%)
(7) 指導者のすすめ	7(25%)	(7) 指導者のすすめ	23(12%)
(8) 先生のすすめ	2(7%)	(8) 先生のすすめ	16(8%)
(9) サッカーの友人のすすめ	1(4%)	(9) サッカーの友人のすすめ	14(7%)
(10) 両親のすすめ	5(18%)	(10) 両親のすすめ	9(5%)
(11) きょうだいのすすめ	0(0%)	(11) きょうだいのすすめ	2(1%)
(12) その他	0(0%)	(12) その他	13(7%)

15. 入試制度の活用

(1) スポーツ推薦	14(50%)	(1) スポーツ推薦	90(48%)
(2) 一般(指定校)推薦	0(0%)	(2) 一般(指定校)推薦	18(10%)
(3) AO入試	11(39%)	(3) AO入試	48(25%)
(4) 一般入試	1(4%)	(4) 一般入試	22(12%)
(5) その他	2(7%)	(5) その他	9(5%)

「大学を選んだ理由」として、選抜チームでは「(1) 大学から勧誘」が39%とやや突出している。一方、その他のチームは同じく(1)の回答が24%と最多であるのに加えて、「(2) 強豪校」19%、「(4) 施設・環境」26%、「(6) 勉強との両立」21%が同程度で混在している。こうした違いは、進路検討の時期におけるサッカー選手としてのレベルや将来性が関係している可能性がある。いずれのチームの結果も「進路の決定」には主に両親が関わっていることを示唆したものの、ここでは「(10) 両親のすすめ」の割合は低く(選抜18%・その他5%)、「(7) 指導者のすすめ」(選抜25%・その他12%)を下回っている。

「入試制度の活用」については、選抜チームが50%、その他チームが48%と、いずれも半数近くが「(1) スポーツ推薦」を受けている。次いで「(3) AO入試」が39%・25%を占めている点については、各大学スポーツ推薦における「女子サッカー枠」の有無が関連している可能性がある。

16. 現在の住まい

(1) 実家	3(11%)	(1) 実家	46(24%)
(2) アパート・下宿	21(75%)	(2) アパート・下宿	116(61%)
(3) 部の寮	4(14%)	(3) 部の寮	11(6%)
(4) 一般寮	0(0%)	(4) 一般寮	8(4%)
(5) 親戚の家	0(0%)	(5) 親戚の家	1(1%)
(6) その他	0(0%)	(6) その他	1(1%)

17. 遠征・合宿の費用(複数回答)

(1) 学校や後援会	11(39%)	(1) 学校や後援会	65(34%)
(2) 実家援助	23(82%)	(2) 実家援助	146(77%)
(3) アルバイトなど	4(14%)	(3) アルバイトなど	47(25%)
(4) その他	2(7%)	(4) その他	6(3%)

選抜チームでは「(2) アパート・下宿」75%と「(3) 部の寮」14%、合わせて約90%が、その他チームでは(2)61%と(3)6%合わせて67%が、実家を離れた環境で大学生活を送っている。また、遠征・合宿費用の大半(選抜82%、その他77%)を実家からの援助でまかなっている。大学女子選手のサッカー環境が、そうした援助の可能な家庭の経済状況に支えられている可能性が示唆された。

IV. サッカー選手としてのこれからについて

18. 大学進学時までレコリーグから勧誘

(1) はい	3(11%)	(1) はい	7(4%)
(2) いいえ	24(86%)	(2) いいえ	178(94%)

19. サッカー選手としての目標(複数)

(1) 日本代表	13(46%)	(1) 日本代表	30(16%)
(2) なでしこリーグ	6(21%)	(2) なでしこリーグ	42(22%)
(3) 大学日本一	12(43%)	(3) 大学日本一	78(41%)
(4) 大学のレギュラー	0(0%)	(4) 大学のレギュラー	34(18%)
(5) その他	1(4%)	(5) その他	29(15%)

20. 卒業後の進路(複数回答)

(1) なでしこリーグ	20(71%)	(1) なでしこリーグ	51(27%)
(2) サッカー指導者	2(7%)	(2) サッカー指導者	23(12%)
(3) 教員	2(7%)	(3) 教員	29(15%)
(4) サッカー関連の職に就く	6(21%)	(4) サッカー関連の職に就く	47(25%)
(5) サッカーと関連しない職	1(4%)	(5) サッカーと関連しない職	45(24%)
(5) 公務員	1(4%)	(5) 公務員	45(24%)
(6) 進学	1(4%)	(6) 進学	2(1%)
(7) その他	4(14%)	(7) その他	21(11%)

21. なでしこリーグから勧誘されたら

(1) 勧誘を受ける	13(46%)	(1) 勧誘を受ける	70(37%)
(2) チームによる	14(50%)	(2) チームによる	76(40%)
(3) 勧誘を受けない	1(4%)	(3) 勧誘を受けない	42(22%)

22. 卒業から5年後(複数回答)

(1) なでしこリーグの選手	14(50%)	(1) なでしこリーグの選手	40(21%)
(2) 学校や地域で指導者	8(29%)	(2) 学校や地域で指導者	43(23%)
(3) 仕事をしながらサッカー	8(29%)	(3) 仕事をしながらサッカー	109(58%)
(4) サッカーと関わらない	0(0%)	(4) サッカーと関わらない	19(10%)
(5) その他	2(7%)	(5) その他	2(1%)

選抜チーム・その他チームともに、なでしこリーグからの勧誘を受けた経験をもつ選手はごく少数である。一方、キャリア形成の志向性について、選抜・その他による差異が示唆されるのは、設問19～21の回答である。選抜チームでは、46%がサッカー選手としての目標を「(1) 日本代表」におき、卒業後は71%が「(1) なでしこリーグ」に入ることが希望しているのに対し、その他チームでは、卒業後の進路として(1)を挙げた者は27%、これは「(4) サッカー関連の職に就く」25%「(5) 関連しない職に就く」24%と同程度である。

また、卒業から5年後(20代後半)の自己像として、選抜チームの50%が「(1) なでしこリーグの選手」を選んでいるのに対し、その他チームでは21%にとどまり、「仕事をしながらサッカーを楽しむ」が68%をしめる結果となったのも特徴的である。

(2) 高校生選手を対象とした質問紙調査

2015年8月、「第一回流通経済大学女子サッカーフェスティバル⁷」に参加した10校の高校女子サッカー部選手を対象に、質問紙調査をおこなった。参加校のうち7校は、同年の全日本高校女子サッカー選手権の本戦に出場、あるいは競争率が高い地区での予選上位に進出するなど、いわゆる強豪校と認識することができる。質問紙は会場校である流通経済大学女子サッカー部監督による承認を経て各チームに配布され、大会期間中に回収された。このうち258部を分析の対象としている。

この調査では、先におこなわれた大学生選抜対象の調査から得た知見をもとに、質問および構成を部分的に変更している。したがって、以下、集計結果は可能な範囲で先行調査のカテゴリーを用いて示すこととする。

I. サッカー選手としてのキャリア形成過程について

1. サッカーを始めた時期

(1) 小学校入学前	41(15.9%)	(4) 中学校	15(5.8%)
(2) 小学校低学年	103(39.9%)	(5) 高校	41(15.9%)
(3) 小学校高学年	56(21.7%)		

2. サッカーを始めるきっかけ

(1) 父親	20(7.8%)	(4) 友人	63(24.4%)
(2) 母親	3(1.2%)	(5) 先生・指導者	8(3.1%)
(3) きょうだい	132(51.2%)	(6) その他	29(11.2%)

3. 中学校時に所属したクラブ

(1) 地域クラブ	166(64.3%)	(5) JFA関連	1(50.4%)
(2) 民間スクール	0(0.0%)	(6) Jリーグ関連	7(2.7%)
(3) 学校部活動	45(17.4%)	(7) その他	10(3.9%)
(4) なでしこリーグ関連	12(4.7%)		

4. いまの高校を選んだ理由

(1) サッカー強豪校	122(47.3%)	(6) 偏差値	18(7.0%)
(2) よい指導者	16(6.2%)	(7) 勉強との両立が可能	18(7.0%)
(3) よい施設・環境	27(10.5%)	(8) 大学進学率	0(0.0%)
(4) 自宅から通える	38(14.7%)	(9) 就職率	1(0.4%)
(5) 中高一貫校	2(0.8%)	(10) その他	14(5.4%)

サッカーを始めた時期としては、小学校低学年が39.9%と最も多く、小学校高学年がそれに次ぐ。小学生でサッカーを始め、中学生時はクラブチームに所属というキャリア形成プロセスが主流という点は、大学生選抜にみられた結果と共通している。一方、高

7 2015年8月9日～12日に流通経済大学（茨城県龍ヶ崎市）にて開催。

校からサッカーを始めた選手が15.9%を占めているのは大学生選抜にはみられなかった傾向である。この点に関連して、ある参加校の指導者からは、チームに全国クラスの選手と初心者選手が混在しており、しかし常時レベル別の編成で活動ができるほどの部員数およびスタッフ数ではないため、指導において苦慮している旨の談話が得られた。競技の普及段階で個々のチームが直面する課題として、とくに地方においては強豪校とよばれる高校でも同様の状況が少なくないと考えられる。

II. 重要な他者について

5. 高校進学についての相談相手

(1) 父親	30(11.6%)	(5) 学校の友人	7(2.7%)
(2) 母親	133(51.6%)	(6) チームの指導者	51(19.8%)
(3) きょうだい	9(3.5%)	(7) 学校の先生	22(8.5%)
(4) サッカーの友人	9(3.5%)	(8) その他	4(1.6%)

6. 今後の進路や将来についての相談相手

(1) 父親	27(10.5%)	(5) 学校の友人	14(5.4%)
(2) 母親	161(62.4%)	(6) チームの指導者	7(2.7%)
(3) きょうだい	7(2.7%)	(7) 学校の先生	33(12.8%)
(4) サッカーの友人	15(5.8%)	(8) その他	5(1.9%)

7. サッカーに関わる悩みなどの相談相手

(1) 父親	18(7.0%)	(5) 学校の友人	16(6.2%)
(2) 母親	34(13.2%)	(6) チームの指導者	9(3.5%)
(3) きょうだい	11(4.3%)	(7) 学校の先生	1(0.4%)
(4) サッカーの友人	167(64.7%)	(8) その他	10(3.9%)

ここでの回答にみられる大きな特徴として、所属チームの監督やコーチといった指導者の存在感のなさが挙げられる。先の設問では、高校への進学理由として「サッカー強豪校」が主流であった。しかし進学についての相談相手として、サッカーやサッカー強豪校に詳しいはずの「チームの指導者」が占める割合は20%に満たない。また、悩みごとの1つとして「プレイ・試合のこと」が大きな位置を占めているにもかかわらず、サッカーに関わる悩みなどの相談相手としても、「チームの指導者」は3.5%である。一方、高校進学および高校卒業後の進路の相談相手として圧倒的に多いのは母親である。

先行研究における、男子サッカー選手を対象とした同様の調査では、進路の相談相手としてチーム指導者が大きな存在感をもつという対照的な結果が示されている。このことをふまえると、上記にみられた傾向の背景をさらに掘り下げることが必要である。

Ⅲ. サッカー選手としてのこれからについて

8. 高校3年間のサッカー選手としての目標

(1) 日本代表招集	6(2.3%)	(4) レギュラー	108(41.9%)
(2) 全国大会優勝	74(28.7%)	(5) その他	16(6.2%)
(3) 全国大会出場	54(20.9%)		

9. 大学・短大への進学を考えていますか

(1) 一般入試	47(18.2%)	(4) AO入試	44(17.1%)
(2) 一般(指定校)推薦	73(28.3%)	(5) 海外留学	4(1.6%)
(3) スポーツ推薦	55(21.3%)	(6) 進学は考えていない	56(21.7%)

10. 【Q9で1～5と回答の方】将来、希望する進路

(1) なでしこリーグ	25(11.5%)	(5) サッカーに関連する職業	62(28.6%)
(2) 海外のクラブ	2(0.9%)	(6) サッカーに関連しない職業	61(28.1%)
(3) 地域リーグ	3(1.4%)	(7) 進学	41(18.9%)
(4) サッカー指導者	11(5.1%)	(8) その他	7(3.2%)

11. 【Q9で6と回答の方】将来、希望する進路

(1) なでしこリーグ	6(10.7%)	(5) サッカーに関連する職業	10(17.9%)
(2) 海外のクラブ	1(1.8%)	(6) サッカーに関連しない職業	19(33.9%)
(3) 地域リーグ	1(1.8%)	(7) 進学(専門学校など)	11(19.6%)
(4) サッカー指導者	2(3.6%)	(8) その他	5(8.9%)

12. 高校卒業時になでしこリーグのチームから勧誘されたら

(1) 勧誘を受ける	90(34.9%)	(3) 勧誘を受けず就職する	14(5.4%)
(2) チームや条件による	88(34.1%)	(4) 勧誘を受けず進学する	59(22.9%)

高校卒業後の進路や将来希望する進路については、なでしこリーグへの所属を希望する選手は約10%にとどまるのに対して、約30%が「サッカーに関連しない職業」に就くことを希望すると回答している。また、進学をめざす場合においても、スポーツ推薦等でサッカー選手としてのキャリアを活かすことより、一般入試や一般推薦による進学を考える選手が主流であることがわかった。この点もまた、先に述べた男子サッカー選手とは異なる特徴が、女子サッカーの現状を反映するかたちで示されたといえる。さらに、バレーボールなどの歴史や知名度があり普及規模が大きい競技、すなわち高校女子選手の進路として大学や実業団など選択肢が比較的豊富な他の競技との比較においても、女子サッカーの特徴として解釈できる可能性があり、それについては今後の検討を要する。

(3) クラブチーム選手を対象としたインタビュー調査

2016年3月、日本国内のトップリーグである「なでしこリーグ」1部で例年上位の成績をキープし、歴史と実力を兼ね備えた強豪チーム「A」に所属する田中さん、加藤さ

ん（ともに仮名）を対象に、対象者2名、質問者2名でのインタビュー調査をおこなった。

両選手とも、現在のチームで試合に出る機会は多くはないが、年代別の日本代表に選ばれた経験をもつことから、サッカー選手としてのレベルは非常に高いといえる。また、スポーツキャリアを継続する一方で、都内大学のサッカーやスポーツとは関連のない同じ学部には所属している大学1年生でもある。

I. サッカー選手としてのキャリア形成過程について

現在二人が所属しているクラブチームAは、下部組織であるBの入団テストに合格し、そこから年齢に応じてチーム内で選抜された選手が多くを占めている。競技レベルおよび競争率が高いことで知られているBの入団テストに挑んだ時期ときっかけについて、二人は下記のとおり回答した。

田中：自分は小3ぐらいの時に、Aのサッカー教室にチームで。少年団の女子チームがそれに参加して。そこで受けたっていう気持ちが初めて。友達と一緒に、そのサッカー教室やって。一緒にプレーしたいなって、その時思って。そこからBを受けようっていうのは、自分で思いました。100人に2人ぐらいしか受からないみたいなのは聞いてたんで。何か、ダメ元で受けるだけ受けてみるみたいな。落ちても地元のチームに行くみたいな感じで受けてみて。

加藤：もともといたチームの先輩方がBを受けてたんで、毎年。だから何か、受けなきゃいけないじゃないですけど、受けてみたらっていうのがあったんで、チームに。だから別に親が勧めたとかじゃなくて、受けるところがあるんだら受けてみようみたいな。

Q：当時までしこジャパンに入りたいという気持ちはあった？

田中：小学生の時から、思ってやってはいました。そんな、小3の時とかは、そんな有名でも今ほどではじゃなかったですけど。小6ぐらいの時とかは、もう結構思ったりはしてましたよ。

加藤：同じです。

所属していたチームの仲間あるいは先輩がBの入団テストを受ける際に一緒に、というのが共通するきっかけである。また、小学校高学年の時点で日本代表（なでしこジャパン）を意識していたことが明示された。

II. 重要な他者について

サッカー選手としてのキャリアを継続するにあたり重要な他者として、両親の存在が想定される。テストに合格してBに入団したこと、U-16（16歳以下）日本代表に選抜された際の両親の反応については、以下のように語られた。

加藤：うちの親は期待度、最初よりかは大きくなってるとは感じてはあります。(中略)初めて選ばれた時はすごい、やっばうれしがつてたんで。それが何回か重ねていくうちに、結構応援してくれるようにはなりました。最初よりかは、やっばり。

田中：いや、もう南京とかに見に来てくれるのは、ほんとに。国内とか、近いならまだしも、海外まで長い期間来てくれたりしてたんで。それはすごい感じました。

どちらの選手の両親においても、サッカーに専心することに反対こそしないものの、始めから強く奨励、支援していたわけではない。レベルの高いチームに入り、年代別とはいえ日本代表に選ばれるというプロセスを経て、期待や応援する気持ちが態度に出るようになったことがわかる。とはいえ、両親が選手に対してサッカーのプレイやキャリア形成について直接的な意見を言うということはほぼみられず、本人もそれを求めてはいなかったようである。スポーツキャリアを継続するなかでの高校進学に関しては、以下のように語られた。

Q：高校受験について、親に何か言われた？

加藤：自分は何も。

田中：自分も何も言われてないです。

Q：この成績だったら、もうちょっと上の学校にとかな言われたいの？

加藤：ないです。

田中：私立で単願だったんで。そのまま入っちゃった。何かもう、落ちないみたいなあれだったんで。確約じゃないですけど。私立だから。

Q：加藤さんは、お姉さんがその高校に行ったから。お母さんはそれについて何か言わなかったの。

加藤：全然、何も。そこ行きたいって言ったら、「ああ、いいよ」みたいな。

Q：C大学に行ったのは、どうして？

加藤：栄養系の勉強。栄養っていうか、ご飯作ったり、お菓子作ったりすることが。そこに興味があったから、そういう学校に進みたいなっていうのはありました。

田中：同じです。興味あって。専門学校とか、そっち系行きたいって話も加藤としてて。でもそれは練習に間に合わなくなるからやめたほうがいいみたいと言われてて。結構ぎりぎりまで、自分ら決まらなくて。そしたらコーチから「C大学の試験受けて」みたいな、10日前ぐらいに言われて、いきなり。で、「え？」みたいな感じだったんですけど。まあ、学科とかも、近さとかもあれで、行きたい学科でもあったんで。それで決めました。

Q : Aと距離が近い、D大学とか興味はなかったの。

田中：もっと忙しくなるみたいな。何か時間的にも。しょ……何だっけ、衛生……。

加藤：食物栄養。調理師免許。管理栄養士を取るって言われて。そういう学科だから、もっと忙しいって言われて。

田中：ちょっといいやみみたいな感じでした。

加藤：それはちょっといい。管理栄養士を取るっていう目的ではなかったっていうか。だからちょっと違うなって。オープンキャンパスとか行ったんですけど、やっぱり忙しいって言われたから、無理だなって思ってやめました。

Q : コーチからのC大受験の話は、短期間で決めなくちゃいけない。誰かに相談は？

田中：親に言いました。自分も全然決めてなくて、進路。親も。親は別に、行きたいところ行ったらいい。「何か興味のあることやるなら、それやんな」みたいな感じだったんで。どうしようみたいな感じでした。そしたら、その話が来て。

加藤：自分は、親と一緒にいろんなところ行きました。学校を決めるために、専門学校へ一緒に見に行ったりはしてて。専門学校が親も気に入って。いい、ここにしようかっていう話をした時に話が来たんで。じゃあそっちのほうがいいんじゃないってなって。

高校進学時は、学校の選択において成績のことは本人にとってほとんど重視されておらず、親から勉強するよう強く促されることもなかった。したがって、明示はされなかったものの、高校選択の決め手は「Bでサッカーを継続するのに支障がないこと」であったと考えられる。その際、親は相談相手というより、本人のなかでほぼ確定した結論について報告を受け、その結論を「受け入れる」という形で関わったことがうかがえる。

一方、大学進学においては、チームのコーチから選択肢が示されたという点で高校進学時とは状況が異なっている。ただし進学先の検討プロセスにおいて、コーチが関わったとされているのはこの件のみである。両選手とも相談相手として中心になったのは親であると述べているが、ここでも親は積極的に検討プロセスに介入してはいない。求められれば意見をしますが、それは選手を何らかの進路に方向づけたり強制したりするためではない。親の位置づけは、選手の選択を穏やかに肯定するところにみられる。

大学か専門学校かという選択肢のなかから進学先を選ぶ際に決め手となったのは、サッカーにまったく関係のない「栄養系の勉強ができる」という点であった。ただし管理栄養士など、資格を目指して本格的に勉強をすることについては、それがサッカーの支障になるため「ちょっといいや」「無理だな」という発想に至る。同様に、専門学校を選ばなかったことについても、「練習に間に合わない」ことが理由としてあげられている。したがって、両選手の選択はあくまでもサッカー選手としてのキャリアを継続させるためのもの、そこに付随して、将来の職業選択とは関係なくその時点での趣味・関心にマッチしたものであったといえる。

III. サッカー選手としてのこれからについて

Q : この後、大学卒業したらどういうふうやっていこうと思ってるのかな。

田中 : 全然決めてないです。

Q : A って歴史もあって、たくさん日本代表とか出してるじゃない。そういう先輩を見て、何か考えることはある？

田中 : 今のチームの試合に出たいです。

加藤 : 今は、今のことしか考えられないっていうか。そんな先々のことを考えてる余裕がないっていうか。自分、目の前のことを、こう。(なでしこジャパンに入る) 夢はありますけど。まずは目の前のことかなっていう感じです、自分は。

田中 : やっぱ昔から、なでしこに入って活躍するっていうのは、自分の夢でもあったんで。そこは常に目指してますけど。やっぱチームで試合に出ないと、そこもなかなか難しいですし。Aのセンターバックは、なでしこのセンターバックでもあって。チームで試合に出れば、そこに一番近づくっていうか、それはあるんで。やっぱり、身近にそういう選手がいるっていうのは、他のチームよりも得るものは多いじゃないですけど、そういうのあるんで。やっぱりこのチームで、今自分にできることっていうのをしっかりやっていくのが一番の近道かなっていうのは感じます。

先述のとおり、インタビュー当時は両選手とも下部組織からトップチームAに上がったからのキャリアが短く、レギュラーメンバーとして定着していない状態であった。とはいえAは日本の女子チームの中でつねにトップレベルにあり、そのメンバーに入ること自体が狭き門である。また、二人は年代別の日本代表にはコンスタントに選ばれてもいる。そのような選手であっても、サッカー選手としての今後について明確なビジョンを持っていないということが、上記のやりとりから明らかになった。つまり、「自身のこれから」を問われたとき、本人の口からはっきり言葉にできるのは、「所属チームで試合に出ること」という日常のなかに置かれた目標であり、そうした日常のくりかえしの先に「夢」としてのなでしこジャパン入りがある。そして、なでしこジャパンの「さらに先」については、少なくとも現実的な問題としては、ほぼ考えられていないようである。

本調査のためにクラブを訪問した際、チームスタッフとの会話から、以下の情報が得られた。選手に対して進路や将来についてしっかり考えるよう意識的に促しているが、学生選手も卒業後非正規で働きながらサッカーを続ける選手およびその家族も、なかなかそこに向き合わず「どうにかなる」という考えから抜けきれないことが多いという。今回の調査対象となった両選手も、その傾向に当てはまるといえるだろう。

3. まとめと今後の方向性

以上、計3件の質問紙調査およびインタビュー調査の結果を示し、各質問群における回答の特徴的な点を述べてきた。それらをふまえたまとめとして、次のことが言える。

まず、質問紙調査からは、いわゆるスポーツ推薦制度の活用などサッカー選手としてのキャリアに依拠しない大学進学志向や、卒業後のスポーツキャリア継続に対する非積極性が明確にみられた。それはつまり、インターハイ出場あるいは上位進出をコンスタントに果たしている高校、そしてユニバーシアード大会に出場するレベルの選手であっても、「サッカー選手であること」を自分の学歴や職業を規定する要素として捉えていないということである。したがってこの結果は、日本女子サッカーの歴史と現状を背景におきつつ、女性アスリートのライフコースにおいて、スポーツキャリアがどのような位置づけにあるのかという視点からの分析を要すると考えられる。

また、高校・大学への進学や卒業後の将来についての相談相手は圧倒的に母親が多く、この年代の女子選手のキャリア形成プロセスにおいてチーム指導者の存在感が希薄であるという点も明らかになった。対象となったチームには女性の指導者が何名かいたものの、全体としては男性指導者の方が主流である。そのことがどの程度影響しているのか、今後さらなる掘り下げが必要である。今回おこなった質問紙調査は、先行研究における同年代男子選手を対象とした調査と対照的な結果を示すものであり、多角的な比較検討によってさらなる考察が可能となる。

一方、インタビュー調査からは、とくにキャリア形成プロセスそれ自体およびキャリア志向性に関する部分で、多くの部分において質問紙調査の結果を反映するような回答がえられた。インタビュー対象となった二人の選手は、例に漏れず、中学入学以降もサッカーを継続できる機会や環境を求めて、自ら積極的に動き判断する必要に迫られていた。そのプロセスで「より強いチーム・レベルの高いチーム」が志向されてきたが、向かう先に何らかの具体的なゴールが見えているわけではなく、「今、いかに選手としての自分を高めるか」という目の前の課題をクリアするための選択の積み重ねであったことがうかがえる。つまり、キャリア形成プロセスにおいて「今のことしか考えられない」というありようが確認できるのである。「大学生」という社会的に安定した立場でスポーツキャリアを続ける生活は、数年後には終わる。その後、さらにキャリアを継続するためには、サッカーとは関係のない仕事をして生活費を稼ぐことになる可能性が高く、しかもその生活をいつまで続けることになるのかわからない。そうした状況では、「その後」の計画を立てることはおろか、想像することも困難であろう。ただクラブチームの場合、すでに同じチームにモデルケースが存在している。身近なところで卒業後のあり方が現実として見えるという点は高校や大学のサッカー部とは大きく異なる点であり、選手のキャリア志向に少なからず影響をおよぼしていると考えられる。

以上、一連の調査をもとに、今後の分析・考察に向けて論点を提示してきた。先に述べたとおり、調査によって、先行研究において示された男子サッカー選手の特徴とは異

なる結果が、日本女子サッカーの歴史と現状を反映するかたちで示されたと考えられる。不透明かつ限られた選択肢のなかでのキャリア形成が、社会的な視点からのより広い文脈においてどのような意味をもつのか。本稿で示した論点について、理論的知見との接合をはかりつつ、分析を深めていきたい。

参考文献

- 山本教人, 多々納秀雄, 吉田毅, 三本松正敏, 松尾哲矢, 1999, 「高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向」『健康科学』21:29-39.
- 飯田義明, 2012, 「Jクラブに所属するユース選手における進路決定プロセスに関する一考察」『専修大学体育研究紀要』36:17-28.
- 飯田義明, 2013, 「学外スポーツ活動に対する教育投資に関する調査から—プロサッカークラブに通う子供の保護者を対象に—」『専修経済学論集』48(2):145-152.
- 松尾哲矢, 2015, 『アスリートを育てる〈場〉の社会学—民間クラブがスポーツを変えた』, 青弓社.
- 飯田義明, 李宇飏, 2016, 「Jクラブ・ユース選手における学校生活——教師の「語り」からの検討——」『体育研究』50:23-34.

〈付記〉本報告は平成27～29年度文部科学省科学研究費（基盤研究（C））「日本の女子サッカー選手におけるキャリア形成プロセスの研究」（研究代表：稲葉佳奈子）の成果の一部である。

稲葉佳奈子 成蹊大学文学部 准教授
飯田 義明 専修大学経済学部 教授
上向 貫志 武蔵大学基礎教育センター 教授

2017年8月31日

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan